

Young Perceptionists' Seminar 2018

若き心理学者たちよ、知覚を研ぎ澄ませ。

日程

2018年9月17日 (月) — 19日 (水)

会場

ホテル大阪KEIKO

〒542-0072 大阪府大阪市中央区高津2丁目3-6

(千日前線・堺筋線・近鉄線「日本橋」駅7番出口から徒歩5分)

Web: <http://kiso.hus.osaka-u.ac.jp/yps/2018/>

Twitter: @yps_2018

E-mail: yps2018osaka@gmail.com

プログラム最終更新: 2018年9月14日

目次

1. ご挨拶	4
2. 大会概要	5
3. 大会スケジュールの概要	8
4. 講演・発表演題・スケジュール	9
5. 特別講演内容	17
6. セッション内容	19
7. エクスカーション	35
8. 大会参加者リスト	36
9. 大会開催にかかる助成	38
10. YPS2018 準備委員会	39

1. ご挨拶

Young Perceptionists' Seminar (YPS) は、1972 年に名古屋大学の学生を中心に発足した、若手知覚研究者の情報交換・討論・交流を目的とする合宿形式の研究会です。第 46 回となる今年は大阪大学が運営を担当することになりました。

今回は 37 名の方にご参加いただき(準備委員含む)、24 件のご発表が行われる予定です。また、特別講演といたしまして、立命館大学より佐藤隆夫先生、大阪大学より森川和則先生をご招待させていただきました。これらのご発表・ご講演と、活発な議論を通じ、皆様のご研究がより一層進展することを心より期待しております。

加えて、全国よりお集まりいただきました皆様に積極的な交流をしていただくことも YPS の目的の一つです。今回の YPS が、皆様のより広いつながりへの一助となれば幸いです。

YPS2018 準備委員長
小林勇輝

2. 大会概要

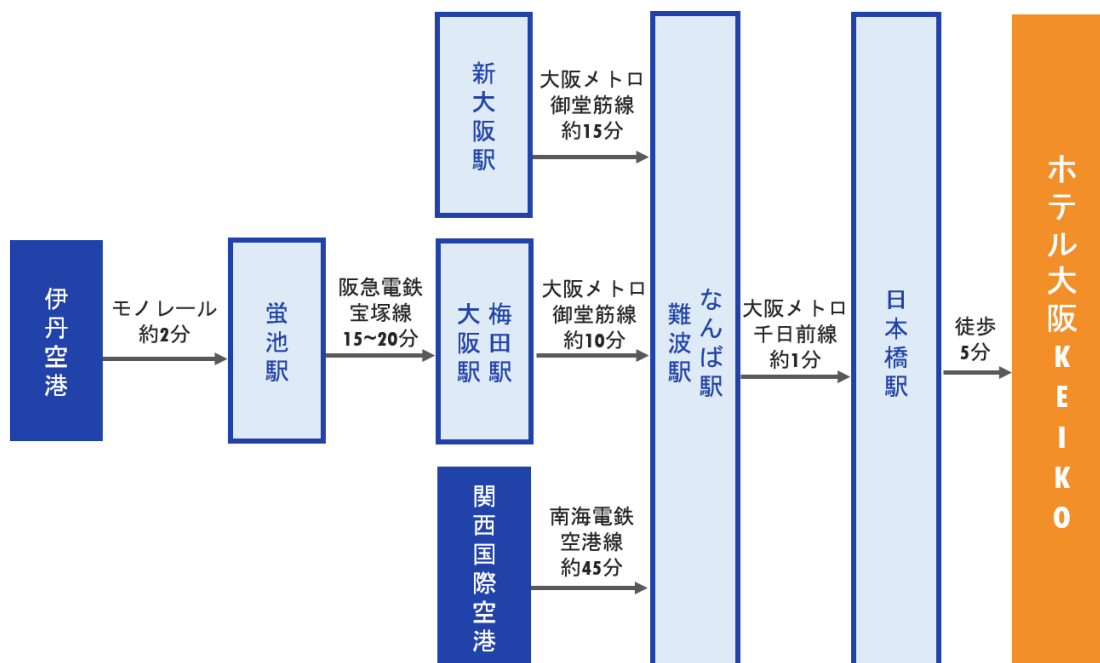
A) 会場案内

ホテル大阪 KEIKO

〒542-0072 大阪市中央区高津 2-3-6

<http://hotel-osaka-keiko.com/>

B) 交通案内



C) 大会参加費・宿泊費

学生 17,000 円（参加費 0 円，宿泊費 16,000 円，懇親会費 1,000 円）

有職者 26,000 円（参加費 3,500 円，宿泊費 18,000 円，懇親会費 4,500 円）

※受付にて現金でお支払いいただきます。

※学振 DC・PD は有職者に含みます。

※部分参加の方は，別途徴収します。

D) エクスカーション

和食たちばな 大阪府中央区道頓堀 1-9-19 大阪松竹座地下 2 階

<https://r.gnavi.co.jp/k082307/>

詳しくは，「7. エクスカーション (p.35)」をご参照ください。

E) 受付

受付時間（9 月 17 日）は，12 時 00 分から 12 時 40 分です。この時間までにお済ませください。

F) 発表について

PowerPoint 等を用いた口頭発表形式です。

発表時間はお一人当たり 28 分（発表時間 20 分，質疑応答 8 分）です。

特別講演①～②の講演時間は，お一人当たり 75 分（発表時間 60 分，質疑応答 15 分を予定）です。

※準備委員会の方で，PowerPoint 2013, Acrobat Reader が起動できるノートパソコン (windows 10) を準備します。発表資料の入った USB メモリーをお持ちいただければ，使用可能です。

※ご自身でパソコンを持ち込み，利用していただいてもかまいません。接続端子は VGA です。

G) 諸注意

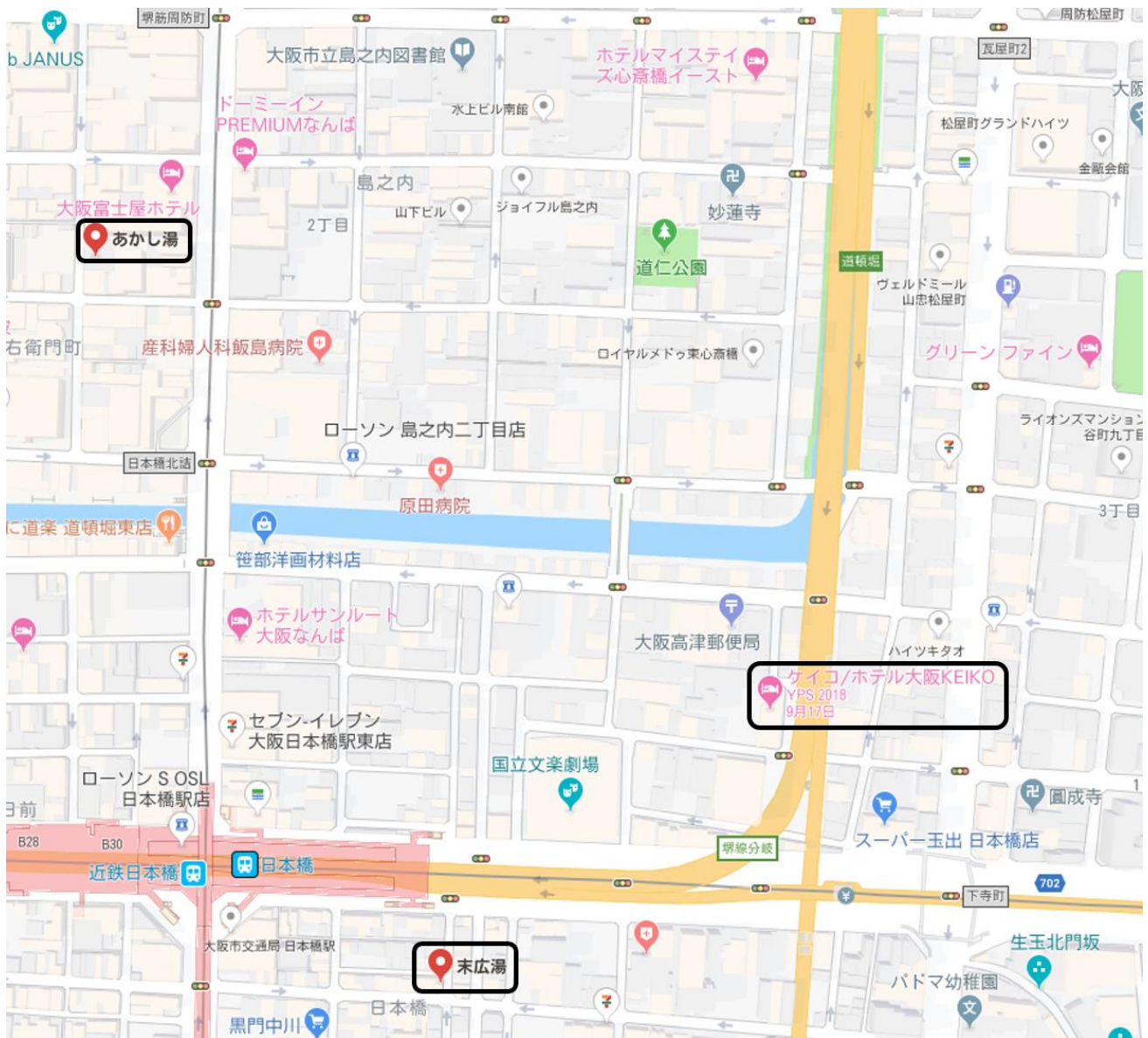
会場ホテルには Wi-Fi がございます。

ハンドタオル，バスタオル，歯ブラシ，歯磨き粉，髭剃り，浴衣，ボディーソープ，シャンプー（リンスインシャンプー含む）はご用意がございます。

部屋ごとに浴室がございりますが，近隣の銭湯をご利用いただいてもかまいません。

[銭湯] あかし湯：ホテルから徒歩 10 分，大人 440 円

末広湯：ホテルから徒歩 5 分，大人 440 円，月曜定休



Powered by GoogleMap

旅館から徒歩4分程度の距離にコンビニエンスストアがございます。

1日目の昼食のご用意はございませんので、あらかじめご了承ください。

3日目の昼食はエクスカージョンにて用意がございますが、エクスカージョンに参加されない場合はご用意はございませんので、ご了承ください。

3. 大会スケジュールの概要

	9月17日	9月18日	9月19日
7:00			
7:30			
8:00		朝食	朝食
8:30			
9:00			
9:30		セッション4 9:00-10:30	セッション7 9:00-10:30
10:00			
10:30			
11:00		特別講演① 佐藤隆夫先生 10:40-11:55	セッション8 10:40-12:10
11:30			
12:00	受付		閉会のあいさつ
12:30	開会のあいさつ	昼食	解散 エクスカーショ会場へ移動
13:00			エクスカーション 昼食
13:30	セッション1 13:00-14:30	セッション5 13:30-14:30	
14:00			
14:30			
15:00	セッション2 14:40-16:10	セッション6 14:40-16:10	
15:30			
16:00			
16:30	セッション3 16:20-17:50	特別講演② 森川和則先生 16:20-17:35	
17:00			
17:30			
18:00			
18:30	夕食	夕食	
19:00			
19:30	休憩 & お風呂	休憩 & お風呂	
20:00			
20:30			
21:00			
21:30			
22:00	ナイトセッション	ナイトセッション	
22:30			
23:00			
23:30			

4. 講演・発表演題・スケジュール

※丸印（○）は筆頭発表者を示します。

9月17日（月）

1. 受付（9月17日 12:00-12:40）

受付は、この時間にお済ませください。

2. 開会のあいさつ（9月17日 12:45-12:50）

YPS2018 準備委員長 小林 勇輝

3. セッション1（9月17日 13:00-14:30）

S1_01

株価予測課題における個人特性の影響

- 篠原 恵（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 綿村 英一郎（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 森川 和則（大阪大学大学院人間科学研究科）

S1_02

温冷覚刺激の複数箇所提示による温冷逆転現象

- 新井 啓介（立命館大学大学院情報理工学研究科）
- 橋口 哲志（龍谷大学）
- 松室 美紀（立命館大学大学院情報理工学研究科）
- 柴田 史久（立命館大学大学院情報理工学研究科）

S1_03

明るさや奥行きに関わる新しい錯視図形

○白井 健太郎 (立命館大学総合心理学部)
北岡 明佳 (立命館大学総合心理学部)

4. セッション2 (9月17日 14:40-16:10)

S2_01

斜交座標系での視線知覚空間における異方性

○森 将輝 (慶應義塾大学/日本学術振興会)
渡辺 利夫 (慶應義塾大学)

S2_02

画像刺激によって喚起される感情価と覚醒度が有効視野の範囲に及ぼす影響

○増田 奈央子 (久留米大学比較文化研究所)
園田 直子 (久留米大学文学部)

S2_03

直線検出に関するメカニズムの検討

○森田 磨里絵 (立命館大学大学院心理学専修/日本学術振興会)
佐藤 隆夫 (立命館大学総合心理学部)

5. セッション3 (9月17日 16:20-17:50)

S3_01

自由選択課題における postdictive illusion

○水原 啓太 (大阪大学大学院人間科学研究科)
武藤 拓之 (大阪大学大学院人間科学研究科/日本学術振興会)
入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)

S3_02

幾何学図形を用いた感情情報が視聴覚相互作用に与える影響の検討

○竹島 康博 (同志社大学心理学部)

S3_03

音楽のリズム知覚に関する大脳皮質の「振動子モデル」

○佐藤 那由多 (大阪大学人間科学部)

入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)

6. 夕食 (9月17日 18:30-19:30)

7. 休憩&お風呂時間 (9月17日 19:30-)

お風呂は、ナイトセッション中もお入りになれます。

8. ナイトセッション (9月17日 19:30-)

9月18日(火)

9. 朝食 (9月18日 7:40-8:40)

10. セッション4 (9月18日 9:00-10:30)

S4_01

自己生成されるタイミングの知覚精度低下は知覚・運動系間のノイズ共通性で説明できる

○箕谷 啓太 (東京工業大学工学院情報通信系/日本学術振興会)

柏野 牧夫 (東京工業大学/NTT)

S4_02

食品の見た目の美味しさが注意に及ぼす影響

○小林 由佳 (中京大学心理学研究科)

S4_03

全身振動による標的検出感度の低下

○石松 一真 (滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科)

11. 特別講演① (9月18日 10:40-11:55)

『もの』を見る

佐藤 隆夫 (立命館大学)

12. 昼食 (9月18日 12:00-13:00)

13. セッション5 (9月18日 13:30-14:30)

S5_01

ベクションの3次元実空間における移動場面の影響—ドローンによる空と地の移動映像による比較—

○村田 佳代子 (慶應義塾大学自然科学研究センター)
妹尾 武治 (九州大学芸術工学研究院デザイン人間科学部門)

S5_02

連続フラッシュ抑制法を用いた運動残効の刺激特性の検討

○本居 快 (愛知淑徳大学心理医療科学研究科)

14. セッション6 (9月18日 14:40-16:10)

S6_01

丸と四角が印象評価に及ぼす影響：メタファー一致効果の観点から

○岡村 靖人 (追手門学院大学大学院心理学研究科／日本学術振興会)

S6_02

自己表情の操作者の違いによる印象の違い

○大橋 佳奈 (立命館大学人間科学研究科)
佐藤 隆夫 (立命館大学総合心理学部)

S6_03

野生ニホンザル集団における協力行動実験

○貝ヶ石 優（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）

15. 特別講演②（9月18日 16:20-17:35）

知覚心理学も役に立つ！：錯視研究の実用的応用と産学連携の可能性について

森川 和則（大阪大学）

16. 夕食（9月18日 18:30-19:30）

17. 休憩&お風呂時間（9月18日 19:30-）

お風呂は、ナイトセッション中もお入りになれます。

18. ナイトセッション（9月18日 19:30-）

9月19(水)

19. 朝食 (9月19日 7:40-8:40)

20. セッション7 (9月19日 9:00-10:30)

S7_01

フットステップ錯視は停止／粘着錯視と同じ錯視なのか？

○北岡 明佳 (立命館大学総合心理学部)

S7_02

頭部傾斜が形の恒常性に及ぼす効果

○杉浦 巧知 (愛知淑徳大学健康医療科学部視覚科学専攻)

高橋 啓介 (愛知淑徳大学健康医療科学部視覚科学専攻)

S7_03

物体の表面反射特性に関する視覚記憶の恒常性

○津田 裕之 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

齋木 潤 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

21. セッション8 (9月19日 10:40-12:10)

S8_01

上向きの面は暗く見える

○小林 勇輝 (大阪大学大学院人間科学研究科)

森川 和則 (大阪大学大学院人間科学研究科)

S8_02

物体形状に対する接近一回避動機づけを測る潜在連合テスト（IAT）の比較

- 八木 佑都（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 入戸野 宏（大阪大学大学院人間科学研究科）

S8_03

化粧顔，下から見るか？横から見るか？——アイシャドウによる目の過大視錯視の視点
非依存性——

- 武藤 拓之（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）
- 井手 麻由（大阪大学人間科学部）
- 富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
- 森川 和則（大阪大学大学院人間科学研究科）

26. 閉会のあいさつ（9月19日 12:15-12:20）

YPS2018 準備委員長 小林 勇輝

27. 解散&エクスカージョン（9月19日 12:30-）

現地解散になります。

エクスカージョンへ参加する方々は，12:30 にロビーにお集まりください。

5. 特別講演内容

- 特別講演① (9月18日 10:40-11:55)

『もの』を見る

佐藤隆夫

立命館大学 教授

我々は、ごたごたしたシーンの中から、自分の見たい物を即座に拾い出し、認識することができます。こうしたことが出来るのは、視覚系が、基本的に「もの」を見ることにチューンされているからです。こうした考えは、視覚研究の様々な側面の基本となるものであり、僕の最近の基本的なテーマとなっています。さらに、こうした考えは、ゲシュタルト法則や、マーの制約条件に基づいた視覚理論のもとにもなっていると考えています。今回の講演では、こうした物を見るしくみの一端をいくつかの面白い実例を交えてご紹介するとともに、僕が、行って来た具体的な研究をいくつか紹介し、そうした研究に関して参加者の皆さんと議論したいと思います。

- 特別講演② (9月18日 16:20-17:35)

知覚心理学も役に立つ！：錯視研究の実用的応用と 産学連携の可能性について

森川和則

大阪大学 教授

人間の目に見えている「現実」はすべて脳が網膜からの入力进行分析し解釈し推測した結果であるが、その推測（主観的現実）と物理的現実との間にはしばしばズレがある。そのズレが「錯視」と呼ばれる。知覚心理学における錯視研究は百数十年の長い歴史があり、主に幾何学的図形の見え方のズレの研究が行なわれてきた。近年まで錯視研究は精緻ではあるが日常生活、社会、実用性とは無縁の基礎研究がほとんどであった。しかし、最近、心理物理学的測定法を応用して化粧の錯視効果を定量的に測定できることを筆者らは実証してきた。錯視の日常生活への応用、特に化粧や服装における錯視の活用の研究が社会から注目されている。さらに、このような研究は企業との共同研究にもつながる。知覚心理学の未来を担う若手の皆さんに向けて、上記の観点から学問の意義について再考し、社会のニーズに答え得る現実性のある知覚心理学の可能性について論じてみたい。

6. セッション発表内容

※丸印（○）は筆頭発表者を示します。

※第1 鈴 15 分，第2 鈴 20 分，第3 鈴 28 分

9月17（月）

セッション1

座長：富田 瑛智

S1_01

株価予測課題における個人特性の影響

○篠原 恵（大阪大学大学院人間科学研究科）
富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
綿村 英一郎（大阪大学大学院人間科学研究科）
森川 和則（大阪大学大学院人間科学研究科）

人々は、株式売買のような賭け行動において将来を予測する際、過去の情報を参照する。しかし、同じ情報を参照するにも関わらず、人によってその後の予測は異なり、そのメカニズムは未解明な部分が多い。また、投資における予測は、バイアスや個人の価値観と関連している。投資行動でのバイアスの存在はこれまで研究されてきたが、個人特性との関連はほとんど解明されていない。本研究では、株価チャートを模した刺激に対する予測課題と、性格特性や価値観を測定する尺度を用い、探索的に未来予測と個人特性との関連性を明らかにすることを目的とした。結果、チャートの波形によって参加者の将来予測には偏りがみられた。また、特定のチャートでの予測と浪費度得点との間に正の相関が示された。本研究の結果は、株式投資での過去のチャートの変動のみから将来の株価を予測する手法において生じる、予測傾向の一端を明らかにしたといえる。

キーワード：予測・株式投資・性格特性

S1_02

温冷覚刺激の複数箇所提示による温冷逆転現象

○新井 啓介（立命館大学大学院情報理工学研究科）

橋口 哲志（龍谷大学）

松室 美紀（立命館大学大学院情報理工学研究科）

柴田 史久（立命館大学大学院情報理工学研究科）

これまでに、我々は前腕の複数箇所に温冷覚刺激を提示した際、温覚刺激を冷覚、冷覚刺激を温覚として知覚する現象（以下、温冷逆転現象）を確認した。さらに提示数を前腕の2点から3点に拡張した場合、本錯覚がより発生しやすくなり、特に温覚刺激と冷覚刺激が交互になるよう前腕の3点に提示した場合（温冷温、冷温冷）に被験者の半数以上で本錯覚が発生することを確認した。次なるステップとして、この現象がどのような条件下で起こりやすいのかを確認した。3点の刺激位置の間隔を変更した場合、温冷温「手首側」、冷温冷「肘側」の条件で刺激位置の間隔が狭くなるほど本錯覚が発生しやすくなり、刺激位置の間隔が本錯覚の発生に影響を与えることを確認した。次に、条件として3点の刺激温度と刺激部位に着目し、発生条件をより詳細に分析する。

キーワード：温冷逆転現象，刺激温度，刺激部位

S1_03

明るさや奥行きに関わる新しい錯視図形

○臼井 健太郎（立命館大学総合心理学部）

北岡 明佳（立命館大学総合心理学部）

横並びの2つの正方形の上下を結ぶように直線を引くと、新しく囲まれた領域が明るく知覚される。また、左右の正方形、真ん中の領域に対して奥行き知覚が生じた。奥行きの感じ方は複数種類確認された。これらの効果は正方形の模様が一樣な斜線模様有的时候に顕著であった。

キーワード：明るさ知覚，奥行き知覚，アモーダル補完

セッション2 (9月17日 14:40-16:10)

座長：箕谷 啓太

S2_01

斜交座標系での視線知覚空間における異方性

○森 将輝 (慶應義塾大学・日本学術振興会)
渡辺 利夫 (慶應義塾大学)

森・渡辺 (印刷中) は、視線知覚空間が、空間内を直交する二軸の方向に異方性が生じていることを見いだしている。しかし、これらの二軸が直交することが仮定できるかは定かでない。そこで、本研究では、座標軸の斜交性を考慮に入れた写像関数を構成し、森・渡辺 (印刷中) の研究で用いられた実験データに当てはめた。その結果、視線知覚空間 (I'II'座標系) は、物理空間 (I II座標系) の原点を (-16.4, -6.9) に移動し、I 軸、II 軸をそれぞれ反時計回りに 3.9°、5.4° 回転し、1.230 倍、0.507 倍したものであることを見いだした。これより、空間内を斜交する二軸の方向に空間の異方性が生じていることが示唆された。さらに、本研究で構成された写像関数は、アフィン変換による写像関数よりも、座標軸の斜交性を考慮している点において、より広い枠組みで空間の異方性を取り扱うことを可能にした。

キーワード：異方性、視線知覚空間、斜交座標

S2_02

画像刺激によって喚起される感情価と覚醒度が有効視野の範囲に及ぼす影響

○増田 奈央子 (久留米大学比較文化研究所)
園田 直子 (久留米大学文学部)

本研究の目的は、情動を喚起させる画像を見て喚起される感情価と覚醒度が、有効視野の範囲に与える影響を検討することである。まず、画像選択のために画像を見たときの参加者が感じる感情価と覚醒度、画像刺激の複雑性の3項目について評定してもらう予備実験を行った。予備実験より感情価と覚醒度の2次元において幅広い範囲を満たすために不快・低覚醒刺激、不快・高覚醒刺激、快・低覚醒刺激、快・高覚醒刺激からそれ

ぞれ 20 枚ずつ選出し、実験に使用した。また、選出した画像は複雑性の低い画像を用いた。また、画像は IAPS (International Affective Picture System; Lang, Bradley, & Cuthbert, 2008) と OASIS (Open Affective Standardized Image Set; Kurdi, Lozano, & Banaji, 2017) から用いた。有効視野測定課題は中心課題と周辺課題を同時に呈示する二重課題を用い、周辺課題の偏心度は 6° か 9° , 12° , 15° のいずれかであった。有効視野の広さの指標は、周辺課題の正答率を用い、分析を行った。

キーワード：有効視野、情動、複雑性

S2_03

直線検出に関するメカニズムの検討

○森田 磨里絵 (立命館大学大学院心理学専修 / 日本学術振興会)
佐藤 隆夫 (立命館大学総合心理学部)

曲線を検出するメカニズムにおいて、直線の検出は、相反する 2 方向の湾曲に対し感度を持つ検出器の反応比が、拮抗している状態を指すと考えられている。しかし、これとは別に、直線に選択的な検出機構が存在している可能性も考えられる。本研究では、直線の検出場面において、直線自体に感度を持つメカニズムが存在するか否かについて検討した。実験では、直線刺激に対する順応を行った後、曲線刺激と直線刺激を同時に呈示し、直線の検出感度（直線と曲線の弁別感度）を測定した。その結果、順応を行わなかった統制条件と比較し、直線の検出感度が有意に高くなった。また、曲線刺激に順応した後に同様の測定を行ったところ、直線に順応した場合ほど大きな感度上昇は確認されなかった。これらの結果は、2 つの湾曲検出器のみを想定した従来のモデルでは説明が困難であり、直線を選択的に検出する機構の存在を示唆していると考えられる。

キーワード：直線検出、形状残効

セッション3 (9月17日 16:20-17:50)

座長：小林 勇輝

S3_01

自由選択課題における postdictive illusion

○水原 啓太 (大阪大学大学院人間科学研究科)
武藤 拓之 (大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会)
入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)

複数の円のうち任意の円の色が変化するまでに1つの円を素早く選択する自由選択課題では、変化までの時間が短いと、色が変わった円が選ばれる割合が偶然よりも高くなる。この現象は、色の変化後に円を選んだにもかかわらず、変化前に選んだと錯覚するために起こる。色の変化がその後の選択に影響するが、人の主観経験上ではこれらの生起順序が逆転するため、変化が人の選択に後付け的(postdictive)に影響したと解釈できる。この知見を拡張するために、色が変わった円を選んだか、他の円を選んだか、あるいは色の変化までに選択が間に合わなかったかを答える三択課題と、色の変化までに選択が間に合ったか否かのみを答える二択課題を実施した。実験の結果、人が自身の意思決定タイミングを誤認している新たな証拠が得られた。本発表では、自身の意思決定タイミングを評価させる課題の問題点と今後の可能性について検討する。

キーワード：タイミングの知覚、自由選択、意思決定

S3_02

幾何学図形を用いた感情情報が視聴覚相互作用に与える影響の検討

○竹島 康博 (同志社大学心理学部)

視覚情報と聴覚情報の統合過程において、時空間情報や物体情報が大きく関与していることが報告されている。一方で、感覚刺激のもつ感情情報による影響の検討はまだ十分に行われていない。そこで、本研究では感情刺激が視聴覚相互作用に与える影響の検討を行った。知覚レベルでの影響を調べるため、視聴覚相互作用によって生じる分裂／融合錯覚の生起頻度を指標に用いた。さらに、低次の視覚特徴による影響を小さくするた

め、感情刺激として幾何学図形を用いた。視覚刺激としてネガティブ刺激である逆三角形、ポジティブ刺激である円形、中性刺激である三角形を提示し、周辺視と中心視についてそれぞれ異なる実験で検討を行った。実験の結果、周辺視での分裂錯覚においてのみ、逆三角形と円形の分裂錯覚の生起頻度がともに三角形よりも多くなっていた。したがって、本研究から視野に依存した感情情報は視聴覚情報の統合過程への関与が示唆された。

キーワード：視聴覚相互作用，分裂／融合錯覚，幾何学図形

S3_03

音楽のリズム知覚に関する大脳皮質の「振動子モデル」

○佐藤 那由多（大阪大学人間科学部）

入戸野 宏（大阪大学大学院人間科学研究科）

人間はなぜリズムの繰り返しを知覚できるのだろうか。周期的な音刺激が突然欠落すると、欠落の直後に脳電位反応が見られる。この反応は、周期的刺激を内的に符号化し、その到来を予測する能力の表出であると考えられる。本研究では、脳内に α 帯域（8–13 Hz）付近の周波数を持った安定軌道で振動するリミットサイクル振動子を多数想定した数理モデルを構築した。特定の位相付近で加えられた外部刺激に対して各振動子が位相リセットを起こすと仮定すると、外部刺激の周期を倍数に持つ振動子のみが同期して振動することによって、その周期を符号化できる。その結果、刺激が欠落した時刻、およびその後にも同期的な活動が増大することを示した。約 100 ms の短周期の振動子の組み合わせによって、音楽のリズムのような長周期を符号化できるというこの仮説について、大脳皮質における予測符号化モデルの観点から考察する。

キーワード：繰り返し，脳波，予測符号化

9月18日(火)

セッション4 (9月18日 9:00-10:30)

座長：森 将輝

S4_01

自己生成されるタイミングの知覚精度低下は知覚・運動系間のノイズ共通性で説明できる

○箕谷 啓太 (東京工業大学工学院情報通信系/日本学術振興会)

柏野 牧夫 (東京工業大学・NTT)

自己の身体動作やそれに伴う感覚結果のタイミングを正確に知覚することは正確に運動タイミングを制御するために必須である。たとえば一定のテンポに沿って音を鳴らすことが求められる典型的な音楽演奏では、演奏者は自身が鳴らす音のタイミングが要求テンポに沿っているかどうかを知覚し、次回以降の運動タイミングを修正する。このような自己生成されるタイミングの知覚特性について調べるために、時間再生課題と弁別課題を組み合わせた実験を行った。その結果、自己動作によって提示される音のタイミングの知覚は、受動的に提示される場合と比較して、標的間隔が比較的長い場合に(1-2秒程度以上)精度が低下することを明らかになった。さらに、この自己生成されるタイミングの知覚精度低下が時間知覚・運動系間に共通のノイズが存在することによって説明できることを数理モデルの構築と解析によって示す。

キーワード：時間知覚, メタ認知, 身体動作

S4_02

食品の見た目の美味しさが注意に及ぼす影響

○小林 由佳 (中京大学心理学研究科)

人は食品に対して、超短時間提示でもそちらに対して反応し (Delorme, Richard & Fabre-Thorpe, 2000) , デザートのような接近性欲求の高い食べ物は注意の範囲を狭め

る(Gable & Harmon-Jones, 2008) と報告されている。本研究では、美味しそうな食品は他の対象に比べて注意を引きつけるかを Attentional Blink 課題を用いて検討した。結果、T2 に食品が呈示された場合、T2 に物が呈示された場合よりも、T1 に呈示された乗り物の正答率が下がることが報告された。本研究から、後続する刺激が食品かそうでないかにより、先行する刺激の検出に影響するというポストディテクティブな効果が示唆された。

キーワード：食品，注意，時間知覚

S4_03

全身振動による標的検出感度の低下

○石松 一真（滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科）

全身振動によりアクションスリップが増加することが知られている(Ishimatsu et al., 2016)。本研究では、全身振動への曝露が標的の検出感度に及ぼす影響を Sustained Attention to Response Task (SART) を用いて検討した。参加者 (N =19) は、go 刺激 (1, 2, 4-9)にはできるだけ素早く正確にキー押し反応し、no-go 刺激 (3) には反応しないことが求められた。全身振動(17Hz, 1.0m/s² RMS)に曝露される WBV ブロックと曝露されない No-WBV ブロックの2条件を設定し、条件間で SART 成績を比較した。結果、WBV ブロックにおける標的の検出感度(A')は No-WBV ブロックよりも有意に低く、全身振動により標的の検出感度は低下する可能性が示唆された。no-go エラーや反応時間の結果も踏まえ、行為制御という観点からも考察を進める予定である。

キーワード：ヒューマンエラー，感度，反応抑制

セッション5 (9月18日 13:30-14:30)

座長：武藤 拓之

S5_01

ベクシヨンの3次元実空間における移動場面の影響 —ドローンによる空と地の移動映像による比較—

○村田 佳代子 (慶應義塾大学自然科学研究センター)
妹尾 武治 (九州大学芸術工学研究院デザイン人間科学部門)

広域な視野に一様な方向に動く視覚刺激を提示すると、観察者はその運動と反対方向に錯覚的に自己身体の移動感覚を覚える。この現象の事をベクシヨンと呼ぶ (e.g., Brandt et al., 1973)。こうした現象を引き起こす最適な刺激は何か。Riecke et.al., (2016) は、自然な街の風景とその風景画像をスクランブルした刺激を用意した。その結果、グローバルなシーンの一貫性と存在がベクシヨンには重要であることを示した。そこで我々は、グローバルなシーンの中で、より日常経験に近いシーンと日常的に経験の少ないシーンを空または地における移動場面動画を作成し、検証した。刺激はドローンによる空撮動画を用いて、空を移動している場面と、地面の上を移動している場面とを製作した。同じ移動場面であっても、その空間的な位置や、移動ベクトルの違いが、ベクシヨン誘引に違いを及ぼすかどうかを検討した。その結果、全ての指標で地面のシーンがより強いベクシヨンを示すことを報告した。

キーワード：ヒューマンエラー， 感度， 反応抑制

S5_02

連続フラッシュ抑制法を用いた運動残効の刺激特性の検討

○本居 快 (愛知淑徳大学心理医療科学研究科)

両眼分離視下の優位眼に激しく変化する刺激を呈示し、他眼を抑制する連続フラッシュ抑制下 (CFS) での運動順応 (MAE) の両眼間転移 (IOT) を検討した。Maruya et al.

(2008) は、非抑制下の MAE に比べて順応眼(same eye)では MAE の持続時間が static な test 刺激で約 30%抑制され、dynamic な test 刺激で約 50%抑制される一方で、非順応眼(other eye)では、static 刺激で非抑制下でも転移は生じず、dynamic 刺激では非抑制下で認められた転移が抑制によって完全に消失することを示し、static 刺激は early level、dynamic 刺激は加えて high level でも処理されるところの運動視段階処理モデルの妥当性を明らかにした。一方、MAE の刺激選択性について多く報告されているにもかかわらず、CFS を用いた研究では刺激選択性について考慮されていない。そこで、MAE の空間周波数選択性について検討し、順応刺激と test 刺激の空間周波数が等しい場合、CFS の抑制度が異なることを見出した。この結果は、運動処理系の各水準の処理の刺激選択性を強く示唆するものである。

キーワード：運動順応，連続フラッシュ抑制，両眼間転移

セッション 6 (9月18日 14:40-16:10)

座長：篠原 恵

S6_01

丸と四角が印象評価に及ぼす影響：メタファー一致効果の観点から

○岡村 靖人 (追手門学院大学大学院心理学研究科／日本学術振興会)

我々は日常的で具体的な経験をもとに、抽象的な対象を理解している。その結果生じた、概念体系の中の具体的な概念と抽象的な概念の対応関係は概念メタファー(conceptual metaphor: CM)と呼ばれている(Lakoff & Johnson, 1980)。認知機構としての CM が判断や行動に影響を与えることが多数報告されており、メタファー一致効果と呼ばれている(Landau, Meier, & Keefer, 2010)。本研究では CM を通して形としての丸さや四角さを手がかりに自己、他者の印象判断が行われる可能性を検討した。報告者の一連の研究を通して、丸、四角メガネをかけた他者の顔印象評価(Okamura & Ura, 2018)、及び自己の顔印象評価(Okamura & Ura, 2017)、丸、四角を描く(Okamura & Ura, in press)ことによる自己の所有する対人環境の印象評価いずれにおいても、丸は温かさと、四角は有

能さ・厳格さと結びついており、形とパーソナリティに関してもメタファー一致効果が生じることが明らかとなった。

キーワード：丸，四角，メタファー

S6_02

自己表情の操作者の違いによる印象の違い

○大橋 佳奈（立命館大学人間科学研究科）
佐藤 隆夫（立命館大学総合心理学部）

人間にとって感情は生きていく中で常に共にあるものだが、その仕組みや原因は未だ解明されていない。もしこれら感情の仕組みや原因が分かれば、外部もしくは自己の感情をコントロールすることが可能だと考えられる。しかし、これまでの技術では感情生起にかかわる要因同士を完全に切り離すことができなかつたため実証研究は進められていない。先行研究（野口・吉川，2009；吉田ら，2015；大橋，2017）から表情と感情の関係には表情の自発性の有無とモダリティが感情体験にそれぞれ影響しているのではないかと考えた。本研究における自発性とは自分の意志で能動的に自己表情を操作することと定義する。この自発性に着目した先行研究はまだない。そこで、モダリティを視覚情報に固定し、観察者本人の中立的な表情から、本人が自発的に表情変形を行った場合と、外部操作による自動的変形が行われた場合の観察者の主観的印象（感情体験）の評価を行おうと考えている。

キーワード：感情，表情，自発性

S6_03

野生ニホンザル集団における協力行動実験

○貝ヶ石 優（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）

ヒト以外の動物の協力行動を研究することは、ヒトに見られる高度で複雑な協力行動の進化的基盤について重要な示唆を与えられと考えられる。動物の協力行動に影響を及ぼす

社会的要因として、近年注目されているのが採食場面における寛容性の高さである。本研究では、寛容性の高さが大きく異なる2つの野生ニホンザル集団において協力行動実験を実施し、寛容性が高い社会では協力行動が起きやすいという予測を検証した。本研究では、1本のヒモの両端を2頭のサルが同時に引いて報酬を手元に引き寄せる課題を用いた。サルがヒモの片端だけを引いた場合、ヒモが装置から抜けてしまい報酬を手に入れることができなかった。寛容性の高い集団では、実験の成功率は約6割であり、さらに他個体と積極的に行動を調整し課題を成功させる個体も見られた。一方寛容性の低い集団ではほぼ全ての試行で課題が失敗した。本研究から、寛容性の高さは、動物の社会で協力行動が起こるための必要条件であると考えられる。

キーワード：協力行動，動物

9月19(水)

セッション7 (9月19日 9:00-10:30)

座長：村田 佳代子

S7_01

フットステップ錯視は停止／粘着錯視と同じ錯視なのか？

○北岡 明佳 (立命館大学総合心理学部)

フットステップ錯視 (footstep illusion) は、白黒の縞模様の上を、適切な大きさの青と黄の長方形を滑らせた時、それらは一体となって動いていても、あたかも歩行動作のように運動・静止を繰り返すように見える現象である (Anstis, 2001)。一方、停止／粘着錯視 (pausing/sticking illusion) は、ドットがすれ違う時、一瞬停止し、再び動き出して見える時に「タメ」があるように見える効果である (Goldberg and Pomerantz, 1982)。Pomerantz (2018, facebook を介した私信) の主張によれば、フットステップ錯視は停止／粘着錯視の一種である。これらの錯視の異同について検討する。

キーワード：フットステップ錯視, 停止／粘着錯視, 運動視

S7_02

頭部傾斜が形の恒常性に及ぼす効果

○杉浦 巧知 (愛知淑徳大学健康医療科学部視覚科学専攻)
高橋 啓介 (愛知淑徳大学健康医療科学部視覚科学専攻)

我々の視空間は、前額平行面が重力方向と整合している場合に知覚的恒常性を保ち、安定性を保持する。しかし、頭部傾斜や身体傾斜、あるいは視覚入力によって前額平行面と重力方向との間に不整合が生じた場合、視空間の知覚に歪みが生じたり、知覚的恒常性が機能しなくなることが知られている (Higashiyama & Adach, 2006; Werner &

Wapner, 1949)。従来の研究では、空間の歪みの知覚については十分に検討されていない。頭部傾斜には、時計回りに 15°、30° 反時計回りに 15°、30° 前方に 15°、後方に 15° の 7 条件を設定した。標準刺激には、円、十字、矩形の 3 種類を用い、中心を通る重力方向の直線を軸に 30°、60° 回転させた。比較刺激には、各図形を 0° から 15° ステップで 90° まで回転させたものを用いる。この比較刺激により形の恒常性を検討する。単純な図形であると、頭部傾斜させても恒常性が維持されることが示された。

キーワード：形の恒常性

S7_03

物体の表面反射特性に関する視覚記憶の恒常性

○津田 裕之（京都大学大学院人間・環境学研究科）

齋木 潤（京都大学大学院人間・環境学研究科）

恒常性は視覚系が実現すべき本質的機能の一つであり、これまでの研究から色や明るさ、光沢感といった物体の表面反射特性についての知覚的恒常性などが示されている。恒常性は知覚のみならず記憶においても重要と考えられるが、視覚記憶研究の文脈で恒常性が扱われたことはこれまでほとんどなかった。本研究は、視覚記憶においても恒常性が実現されているのか検討することを目的とした。具体的には、物体の表面反射特性、特に光沢に着目し、視環境（照明）が変化しても光沢の視覚特徴を安定して記憶・想起できるかを検討した。実環境照明を用いた写実性の高い物体画像を CG で生成し、これを刺激として調整法による光沢のマッチング課題を実施した。結果、物体を記憶する時点と想起・再生する時点で照明環境が変化したとしても、記憶の成績はほとんど低下しなかった。この結果は物体光沢の視覚記憶に照明変化に対する恒常性があることを示唆する。

キーワード：視覚記憶、恒常性、質感

セッション 8 (9月19日 10:40-12:10)

座長：森田 磨里絵

S8_01

上向きの面は暗く見える

○小林 勇輝 (大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会)
森川 和則 (大阪大学大学院人間科学研究科)

倒立させることにより、知覚される明るさが変化する錯視画像を作成した。この画像は奥に広がる平たい面の画像であり、画像の倒立によって面の向きを上下方向に変化させることができる。実験によって、面の向きが上方向となる際に画像の面部分が暗く見えるという錯視効果が実証された。さらに、面の向きを両眼立体視によって操作した実験2においては、二次元像が全く同じ刺激であるにも関わらず、実験1と同様に上向きの面が暗く知覚された。本研究の刺激は照明の手がかりを含んでおらず、観察者の視覚システムに内在する「光は上から来る」という前提 (light-from-above prior; Ramachandran, 1988) が明るさの知覚に影響した結果と考えられる。これは照明環境の推定と明るさ知覚の直接的な関連を示すと同時に、トップダウン処理が知覚へ影響する証拠といえる。

キーワード：明るさ、照明、トップダウン処理

S8_02

物体形状に対する接近一回避動機づけを測る潜在連合テスト (IAT) の比較

○八木 佑都 (大阪大学大学院人間科学研究科)
富田 瑛智 (大阪大学大学院人間科学研究科)
入戸野 宏 (大阪大学大学院人間科学研究科)

丸みのある物体は角のある物体よりも好まれるが、その理由については未だに論争が続いている。そのメカニズムを明らかにするため、本研究ではマネキン課題 (De Hower et al., 2001)、ジョイスティック課題 (Rinck & Becker, 2007) および主観評定課題を用

いた。マネキン課題は、キー押しにより棒人間を上下に操作して、刺激に近づけたり刺激から遠ざけたりする課題であった。ジョイスティック課題は、レバーを引いたり押ししたりして、刺激を参加者自身に近づけたり遠ざけたりする課題であった。どちらの課題も、丸みのある物体に近づき角のある物体から遠ざかる条件を一致条件とし、その逆を不一致条件とした。大学生・大学院生 28 人が両方の課題を行った。課題×一致性×輪郭の 3 要因分散分析の結果、マネキン課題でのみ一致性効果が認められ、一致条件のほうが不一致条件より反応時間が短かった。さらに、角のある物体では一致性効果は得られず、丸みのある物体でのみ一致性効果が得られた。主観評定課題では好きか嫌いかを 7 件法で尋ねたが、輪郭による好みの差は有意でなかった。

キーワード：輪郭，曲線，一致性効果

S8_03

化粧顔，下から見るか？横から見るか？——アイシャドウによる目の過大視錯視の視点非依存性——

○武藤 拓之（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）
井手 麻由（大阪大学人間科学部）
富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
森川 和則（大阪大学大学院人間科学研究科）

上瞼にアイシャドウを塗ると目の大きさが実際よりも大きく知覚される。この錯視の説明の 1 つである同化説によれば、アイシャドウが目と同化し、さらに目と眉の同化を促進することで目の過大視が生じる。一方、もう 1 つの説明である奥行説によれば、アイシャドウの陰影が奥行き手がかりとして機能し、目が遠くに位置するように知覚されるため目の過大視が生じる。本研究は、同化説と奥行説のどちらがより妥当であるかを明らかにするために、様々な向きの顔刺激を用いてアイシャドウが引き起こす目の過大視錯視の大きさを測定した。奥行説が正しければ、顔の向きが正面から離れるにつれて錯視量が小さくなると予想される。一方、同化説が正しければ、錯視量は顔の向きにかかわらず同程度になると予想される。実験の結果、アイシャドウによる目の過大視は顔の向きとは無関係に同程度生じることが示された。この結果は奥行説を棄却し、同化説を支持するものである。

キーワード：錯視，視点，化粧

7. エクスカーション

<9月19日（水）最終日の昼頃>

●概要

今年度の YPS では、エクスカーションとして道頓堀麦酒醸造の公式レストラン和食たちばなでの食事を企画しました。

道頓堀麦酒醸造は、1996年より道頓堀の大阪松竹座に設立された醸造所であり、大阪ミナミで唯一クラフトビールを作っています。「和食に合うビール」というコンセプトの元に作られ、大阪ケルシュ、大阪アルト、大阪ポーターといったオリジナルのクラフトビールを出来立てで味わえます。当日は、昼食とビール等飲み放題を予定しています。レストランはビール工場を併設しておりますので、工場見学もしていただけます。大阪松竹座という歴史ある劇場の地下にて、大阪の味をお楽しみ下さい。なお、終了後は現地にて解散します。

●行先

和食たちばな 大阪府中央区道頓堀 1-9-19 大阪松竹座地下 2 階
<https://r.gnavi.co.jp/k082307/>

●参加費

昼食代として 3,000 円

●スケジュール（予定）

12 時 30 分 ホテル大阪 KEIKO のロビーに集合

【徒歩にて移動（約 10 分）】

12 時 45 分 「和食たちばな」へ到着

13 時 00 分 飲み放題宴会コース

【食事時間 120 分】

15 時 00 分 現地解散

8. 大会参加者リスト

(五十音順, 敬称略, 30名)

- 麻野井 千尋 (東京女子大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会)
- 新井 啓介 (立命館大学大学院情報理工学研究科)
- 石松 一真 (滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科)
- 白井 健太郎 (立命館大学総合心理学部)
- 午道 青歩 (立命館大学大学院人間科学研究科)
- 大橋 佳奈 (立命館大学大学院人間科学研究科)
- 岡村 靖人 (追手門学院大学大学院心理学研究科／日本学術振興会)
- 貝ヶ石 優 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- 金谷 英俊 (立命館大学総合心理学部)
- 北岡 明佳 (立命館大学総合心理学部)
- 草野 勉 (神奈川大学人間科学部)
- 小林 由佳 (中京大学心理学研究科)
- 小山 真季 (立命館大学大学院人間科学研究科)
- 佐藤 那由多 (大阪大学人間科学部)
- 杉浦 巧知 (愛知淑徳大学健康医療科学部)
- 竹島 康博 (同志社大学心理学部)
- 竹之内 博史 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)
- 津田 裕之 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
- 西村 友佳 (関西学院大学大学院文学研究科)
- 橋口 哲志 (龍谷大学理工学部)
- 増田 奈央子 (久留米大学比較文化研究所)
- 松室 美紀 (立命館大学情報理工学部)
- 水原 啓太 (大阪大学大学院人間科学研究科)
- 箕谷 啓太 (東京工業大学工学院情報通信系／日本学術振興会)

宮坂 真紀子 (女子美術大学大学院美術研究科)

村田 佳代子 (慶應義塾大学自然科学教育センター)

本居 快 (愛知淑徳大学心理医療科学研究科)

森田 磨里絵 (立命館大学大学院／日本学術振興会)

森 将輝 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科／日本学術振興会)

9. 研究会開催にかかる助成

本研究会は、以下の学会から研究会開催にかかる助成を受けております。
ここに感謝の意を表します。

- ・ 日本視覚学会

Vision Society of Japan

日本視覚学会

- ・ 日本心理学会

<https://psych.or.jp/>



- ・ 日本基礎心理学会

<http://psychonomic.jp/>

日本基礎心理学会
The Japanese Psychonomic Society

10. YPS2018 準備委員会

連絡先（代表） yps2018osaka@gmail.com

準備委員長	小林 勇輝（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）
アドバイザー	富田 瑛智（大阪大学大学院人間科学研究科）
広報・Web 担当	武藤 拓之（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）
助成金申請担当	余根田 耕（大阪大学大学院人間科学研究科）
会計担当	篠原 恵（大阪大学大学院人間科学研究科）
会計担当	小川 勇也（大阪大学大学院人間科学研究科）
会計担当	八木 佑都（大阪大学大学院人間科学研究科）